

実際生活と往還する学び（下）

——教師教育と教育実習（11）——

徳本 達夫*・教育学専修第31期生**

From Life-based Learning to Life-based step-upped Learning

——teacher education and teaching practices（11）——

Tatuo TOKUMOTO* and the 31th Junior Students majored Educational Sciences**

はじめに

「上」を受けて、実習生の報告書の概要と絡めながら特徴的なことを報告書から抜粋する形で紹介する。各自が総体としてどのような実習体験をしたのか、そこから何を学んだのかについては、実習生個々に置き直して読み取ることが実習体験の総体を総合的に理解するうえで欠かせない。実習後の事後指導は、ここに立ってなされる。

1. 実習目標の具体性

「上」で既述したように、自己形成史を踏まえながら自己を直視する作業の中で設定された目標は、自己直視の成果であると同時に、児童理解において威力を発揮する。他者理解と自己理解とは循環する作業だからである。不要な自己卑下、無用な責任転嫁を超えた上質の理解は、時代や社会との関わりの中で自己形成を振り返る、質の高い省察が必要となる。

その意味では実習の事前学習にとどまらず、

学生に体得させるべきことは自己と社会との関連を理解できるような確かな学力である。文部科学省『生徒指導提要』が強調する自己指導能力の育成は、社会的リテラシーと対であって意味がある。

学生 C

①児童理解。一人一人に応じた対応が求められるため、児童と関わる上で不可欠である。②教材理解。児童にとって学びある授業をするためには、徹底した教材理解と児童理解が必要である。児童一人一人に最適な教材を、最適なタイミングで活用することが求められる。そして、自己肯定感を育む授業にする。③自己理解。自己を理解しない人が他者を理解することなど出来ない。自分と向き合うことで人と向き合える。自分を愛せなければ、他人を愛することは出来ない。自分が幸せでなければ他人の幸せを心から願うことは出来ない。

私が小学校教員を志したのは、児童が好きで苦しむ児童を助けたいと思ったことがきっかけだった。現在、児童のうつ病・不登校児・引きこもりなど様々な問題がある。また、自殺や殺人など大人になってからも苦しみ続けた結果、道を誤ってしまう人がいる。未成年の犯罪も目にする。

春季課題で「『よい子』が人を殺す～なぜ『家庭内殺人』『無差別殺人』が続発するのか」（尾木直樹）を読んだ。（以後ページ数で表記。）そこで「自分の感情をあまり表に出さない、おとなしくよく言うことを聞く『よい子』たちだからこそ、地中の怒りが爆発した時には、殺人という大惨事にいたるのである。」（P. 52）ということを知った。

私は児童のころ、大人の言うことを素直に聞く、おとなしい「よい子」だった。しかし、大人の見えない

* 本学教授

** 本学初等教育学第31期生3年次生：内海英恵（Hanae UTSUMI）、江藤奈央（Nao ETO）、大坪雅美（Masami OTSUBO）、木村佳美（Yoshimi KIMURA）、佐々木晴菜（Haruna SASAKI）、前田玲香（Reika MAEDA）（50音順）

ところで万引きを繰り返していた。自分でも、何故していたのかわからない。しかし、児童ながらに何かを訴えていたのだと思う。「喜怒哀楽の情念は誰もが同じようにかかえて生活しているのである。おとなしく『よい子』は感情をただ内側に秘めているだけであり、表現の仕方が違うのだという点を、私たちはもっと深く認識すべきではないだろうか。」(P. 53)

自分自身、つらく苦しくもがいていた時期がある。支えてくれた友達や大人がいたから、少しずつ乗り越えられるようになってきた。それでも自分の性格が嫌いだ。しかし、その経験があるからこそ自分だと思えるようになってきた。

私は自分の経験から、人の痛みがわかる人になろう。孤独で一人悩んでいる人の支えになりたい。そのような思いを抱かせないようにしたい。そして誰もが通う小学校で、児童を見守りたいと思うようになった。自分の経験から、小学校の教員を目指した私は、実習を通して何が本当に児童のためになるのかを学んだ。

実習に行くまでは、勉強ができることより人間性が重要で、勉強は二の次で良いと思っていた。しかし、実習を通して児童のためには、学力を付けることも必要なのだと気づかされた。そのために、学びある授業をしなければならないと責任の重さを痛感した。

2. 実習からの学び (1) 児童理解

実習生は実習からの学びの第一に児童理解を挙げる。子どもが見えることは教師にとってすべてである。子どもが見えない者には、「その」子どもの最善の利益保障に向けてのいかなる営みもできない。一般的な子どもではない。抽象論の子どもでもない。個別具体的な生身の存在として子どもをどこまで理解できるか。実習生の自己理解と対の中で見えてくる。

2年次前期教育実習における5日間の関わりで見えてきた児童理解の次元を超えたものがある。同時に、自分のあり方を問うものになっている。児童理解の深さに繋がっている。

学生 B

小学校入学後5ヶ月。授業中は集中力や落ち着きがあり、とても1年生とは思えない。姿勢を正して人の話を聞くことが習慣になっている。きっと児童は様々なことを我慢していたのだろう。近くの人と話し始めたり、手悪さをし始めたりする。その時は、教師の一人一人に応じた言葉がけや全体に向けての言葉がけが

児童に響いていた。それだけではなく、教師が作り出す沈黙や間によって、児童は周りの様子を察し、自分自身を省みる。周りにも注意を向け、児童同士でも高め合う姿が見られた。心の乱れは身体にあるがまま現れる。教師は児童の心の乱れを見抜き、児童自身に自覚させなければならぬと感じた。自分の気持ちを抑制するのは、児童にとってもエネルギーのいることだ。しかし、落ち着いて学び合う学校生活を送るために、低学年から学習規律を身に付けさせ、それを守っていく姿勢を児童同士でもお互いに磨いていくことが大切だ。学校の配慮として、ベテラン教師が1年生を担当していた。節目の時期である、1年生、6年生の担任が重要な役割を果たすと思った。

児童は素直で純粋で、挑戦することを恐れない。いろいろなことをやりたがり、見てもらいたい思いを持っている。そして、新しい自分や物事に会うことが大好きで意欲があった。授業中は全員の前で披露したい思いが児童をやる気にさせる。自分ができるかできないかではなくやりたい気持ちが全身から伝わってくる。もっとやりたい、もっと知りたい、もっと学びたい。そんな思いが、児童から自然と込み上げるような授業をしていきたい。「その気にならぬかぎり人は動かぬ」(大田 堯『教育とは何か』)。印象深い。自分を変えるのは自分である。

学校が山に囲まれていたこともあり、児童は生き物に対して興味や関心が高かった。休憩時間は学級の男児大半が虫取り。掃除時間さえも人目を盗んで虫取り。休憩時間私もその様子を見て、一緒に夢中で遊んだ。楽しかった。実習中私は人間以外の命を近くに感じた。児童はもっとと身近に命を実感していただろう。自然と関わる中で命を実感し、豊かな心も育まれていくと思った。

児童が自然と関わる様子を見て考えた。食べ物頂く時は命に感謝する思いを、当たり前で持っていたことを恥ずかしく、情けなく思った。食べ物や衣服がどの動植物からの命なのか知り、感謝する。それは、生き物がどんな殺され方をして、どんな過程を経て私の一部になるのか知り、自分自身の生活を見直すことだ。人間の手によって、無駄にされる命や何分もかけて殺される命がある。恐怖や不安を感じ、苦しみ、もがきながら消えてしまう。私にできることは何か。児童にどこまで事実を見せたらいいか。ただ事実を突きつけるのではない。児童の実態把握が重要だ。私は、児童が深く考える授業ができなかった。私自身の課題である。

消極的な児童がいた。先生から伺った家庭環境を踏まえながら関わっていくうちに、その子から関わりを持ってくれるようになった。児童から手を握ってくることでも分かった。実習が始まり、2週間はなかったことである。言葉だけではない。普段感じるもののない

ちょっとした変化や表現。それを存分に感じる心を持ち、そこから児童の思いを考える。児童がこれからどう成長していくのか楽しみであった。

全ての人にはこれまで生きてきた環境が大きく関係しており、総合的に理解していくことが大切である。その時だけの判断や理解、一時的な感情で向き合っているといけない。人と関わるには常に相手との関係関係の中で意識し続けていく。そのためには常に自己理解も深めていかなければならない。

児童と関わる時、好かれない思いがあった。しかし、それは自分勝手な考えで、どんな時も児童のためを思った行動をすること。児童は率直である。日常的に色々な場面で児童一人一人を理解し続け、それを授業へどう活かすのか考え続けたい。

3. 実習からの学び（2）教師理解

教職志望者ゆえに、教師としてのあり方を実習生という限界を持ちながらも業務を共にする中で実感的に学び続けている。「上」では、特に教師の多忙性について触れたが、ここでは幅広く、実習生が学んだものを概観する。総体としての教師の人間性が児童のみならず、同業者を目指す後なる者へ感化を与えている。

実習段階では困難であろうが、いずれ自分が実習生指導をする時のことを想像しながら学ぶ。実習での学びは格段に高まる。学ぶ側であると同時に、指導する側に立つという両面を同時に意識する学びである。

学生 A

真似したい指導法とその理由 1点目は、児童のやる気を引き出す声かけや褒め方である。先生方は班単位で褒めたり、机間指導の際は一人一人に声をかけ、花丸を書くなどして、児童とスキンシップをとっていた。児童がいつも以上に生き生きしていた。児童自身が気づき、自ら行動できる声かけや褒め方をすることで、次の目標を持たせ、やる気に繋がる。また、その場その場で気づけるように、常にいろんな面にアンテナをはり、気付く目を持つことが必要になる。2点目は、規律ある教室を作ることである。担任はどの児童に対しても「悪いことは悪い。善いことは善い。」と、平等に対応していた。規律ある教室でなければ、学習も身につかない。将来の理想の児童像を頭に思い浮かべ、そのために児童は何をしなければならぬか、教師自身どんな姿を児童に示さなければならぬか考え、

1年を通して指導していかなければならない。

児童は授業や集団生活を通して、規律を守ることの大切さを学ぶ。児童がこの学級でよかったと思える学級経営をしていきたい。

4. 実習からの学び（3）自己理解

教師理解は、同時に自己理解になる。憧れの対象との出会いは、そこへ向けての自己形成の取り組みを求める。結果像としての理想ではなく、過程像としての理想へ地道な取り組みである。

重要なのは、憧れの対象がどのような思いを持って、どのような体験を学び続けてきたか。ここをしかと盗み取ることが学生を育てる。「与えられるものの過剰、獲得するものの過少」（大田 堯）時代を生きている学生である。貪欲さを発揮できるかどうか。既述のように、多様な体験効果が教師をして豊かな人間性に繋がる。教員としての確かな専門性についても同様である。

学生 D

観察実習では、自分から児童に向かうことを恐れていた。関わることで失敗や嫌われることをつついて考えてしまう。それは、今まで失敗しないように、転ばないように人生を歩んできた自分がいたからだ。難しそうなことには挑戦しない、責任の重いものは避け、いつでもそこそこの立場にいることに満足していた。そういう自分に甘え、傷つくことから逃げてきたつけが回ってきたのだと思った。

本実習では今しかできない、関わらなかつたら関係はつけれないのだ、と肝に銘じて積極的に話しかける努力をした。担任の指導も参考にしつつ、児童との距離を縮める努力をした。沢山話しかけてくれる子、きっかけがあり話そうになった子などいたが、話しかけてもそっけなく返される子もいた。私は小学生の時学級の中でおとなしい性格だったため、同じような立場にいる児童には親近感がわき声を掛けることが多かった。また、一部の女子児童が遊びを誘ってくるためそちらにかまひすぎているのかもしれない。私が構えて話しかけていたから、それが伝わってしまったのだろうか。幾度となく考えた。もっと話しかけていたら関係は変わっていたのだろうか。人に接する時自分が相手から嫌われているのではないかと思う時は、自

分が相手に対してそう無意識に思っている。そんな壁はなくしたい。先生は平等でなくてはいけない。児童の目は純粹でごまかしはきかない。何が本音かをいつも見透かしている。児童と関わるには、自分も先生という建前を脱ぎ捨て1人の人間として向き合わなければ心を開いてくれない。人と関わる対人援助職において、いままでどれだけ様々な人と関わってきたか、どんな関わり合いをしてきたかで教師―児童の関係づくりに多く影響を及ぼしてくることが分かった。

出会いによる経験・関係の質は今までに出会ってきた人の数ではない。表面上ではない“あなたと私”という深い部分で関わり合うことができたかで今の私の質は決まる。人と人は関係を築くことで自分の中に新たな自分が生まれる。自分の中に他者が入ってくる。今ある自分は自分1人でつくりあげたのではない。多くの他者と関わることで、刺激され知らないうちに影響され今ここに自分という人間がいるのだ。そして、関係とは、人だけではない。物質や動植物様々な物も私の心に変化を灯してくれる。直接的・間接的に色々な物と関係を築くことで人は成長していくこと。今の私の中にはどれだけの人やものが存在しているだろうか。楽な方ばかりに逃げようとしていた自分を思い出し、出会い・関わり方のチャンスを逃していたのではないかと、悔やまれる。その結果、自分と言うものを持ってない、周囲に流される生き方をしている自分に気付いた。流され、迷いばかりが生じ、自分でどうしたいのか決められない自分がいることに腹が立つ。苦しい道を歩まず、責任を負おうとしない生き方は結局自分を苦しめる。自分の信念を持ちぶれない気持ちをもちたい。確固たる意志を持ち、自分という存在を認められるようになりたい。

5. 児童が抱える課題への実践的対応

実習は指導教員の長期の指導下、当該時期の児童へ20日間関わるという限定性がある。児童の優れた姿はどのような指導から生まれたか。ここを想像する。手がかりは日々の実習での児童との出会い、教員の授業等をはじめとする指導のすべてである。

同時に、児童の課題にも出会うであろう。どのような実態が当該時期の児童の姿までに成長したのか。あるいは、当該時点では十分でなかったのか。ここを想像する。しかも、指導は一つの結果像でもある。「もう一つの指導」もありえたであろう。ここを徹底的に考え、関わる

ことが実習効果を高める。

学生 F

(2) 児童の自尊感情を高めるために 褒めること。
9 褒めて1叱ること。長く褒めて短く叱ること。みんなの前で褒めて、個人で叱る。先に褒めて後から叱る。なかなかできないこと。どうしても、できていない、やっていないという方向に目や気持ちが向いてしまう。「～しなさい」と注意ばかりになる。それでは児童に自尊感情を持たせることはできない。できていないところに目を向けるのではなく、できているところを褒める。そんなことが日常になると学級経営もうまくいくと思った。

多くの学級を観察して様々な学級の色があると思った。私も様々なものを見る視点を少し変えてみたい。批判する目をなくすのではない。表面だけの良かったことを述べることはしたくない。何を考え、どうしてそのような行動・考え方をするのか。本気で児童を見れば、はっきり分かってくる。どの場面でどのような指導、発言をするべきなのか。ちょっとした指導一つで大きく変わってくる。

6. 大学授業への問いかけ

実習での学びの質は、学生の大学を含むこれまでの学びの総体の質でもある。多くの学生は、実習先の授業を通して、大学の模擬授業のあり方を問題にする。児童役大学生の役不足、15分という授業方式、導入指導に焦点化されていることへの疑問、等々である。いずれも、改善の余地のあることである。

しかし、学生が最も省察すべきは、自身のこれまでの学びの履歴の総体である。それはまた、自分が受けてきた家庭教育・学校教育を中心とする教育とそれを取り巻く時代や社会への省察でもある。残念ながら、報告書ではそこまでは至らない。意識がそこまで届かなかったのだろうか。実習体験を点として捉え、線や面、立体として捉える発想に至らなかったということであろう。

児童を社会的歴史的存在として捉える、価値選択の主体者としての学びをどう保障するか。「あなたと私の関係」はどこまで作れているか。

どう育むか。筆者が担当する教育史、道德教育指導法、特別支援教育等で通奏低音的に強調してきた教育の条理や教育の根幹に関わる主題である。ここに絡める学びが今後の学びの質を高める。筆者が関わってきた大学授業がそこまでの理解の幅、深さを育んでいないということである。卒業論文に残された課題でもある。

学生 E

(1) 実習での実施授業 良かった点として、具体例を出せたこと、授業内で公式に当てはめた学びではなく、公式に至る過程を踏まえた学びができたことだ。また、まとめの作業は、児童から出てきた言葉を繋げることができた。

反省点。教材研究が甘かった。何が大切か熟考し、授業全体を見ていれば、必要最低限の導入、その授業で最も大切にしたいところに時間を割くことができた。目的意識を持つことができる導入・実生活にも役立てることができるということを意識した導入の仕方、支援の仕方を十分に考えるべきであった。的確な発問をすることができなかった。児童に分かりやすいように伝えようと思うほど言い直しをしてしまい、更に混乱させた。児童の意見をもっと拾うべきだ。色々な考えが出ていたにもかかわらず、それを拾わなかった。児童からどのような意見が出るかの予測不足、机間観察でのチェック不足、理解不足である。児童がどこで躓くか予想を立て、それに対する支援方法をたくさん用意しておく必要があった。

授業内では出た意見を共有し、繋げて、広げていき、児童の中で考えさせるような授業が、相互理解にも繋がる。学びを深める意図的な授業の進め方（当て方など）をもっと考えて仕組んでいかななくてはならないと痛感した。児童にとって何の為の学びかを明確にしなければならぬ。一人一人が新しい学びができる授業をしっかりと考えるべきであった。

(2) 模擬授業の振り返り 15分間の模擬授業では導入を意識し、展開への意欲へと繋げられるように考えて行った。導入が10分になることもあった。15分をスムーズに行うということしか考えていなかった。45分を見通した授業ができていなかった。これが本実習にも繋がった。時間配分をしても、私の模擬授業は15分の内容だった。自主的に行った45分の模擬授業では、大学生相手に主な活動に時間をしっかりとって時間いっぱい使うことができた。本実習で本物の児童に対して行くと、模擬授業1時間で行ったものを、2時間に分けて行った。

実際の児童は、大学生が児童をするよりもしっかりしている。大学生は児童になれない。演じるのは、ほ

とんどが理想的な児童だ。よりリアルな授業をするにはどうしたらいいのか。一週間前には指導案を児童役の子に配る、児童観をもっと具体的に書くという意見が出た。例えば、“本学級の児童は、明るく積極的な児童が多い。”という抽象的なものではなく、数値などを使って具体化する。具体化したものを児童役に役を割り振る。これらは、学生ができることだ。

模擬授業で、導入から始めなければならないという規定はない。1番時間をとりたいところを行う。最初に繋げることが難しい。現場の教師も言っていたことだ。教師の言葉ではなく、児童の言葉でまとめることに意味がある。児童から出たまとめの言葉がその授業の価値となる。

7. 学生による実習報告書（資料A～F）

以下、実習当事者である学生の報告書を示す。（配属学年順。同一学年の場合は、順不同。）また、学生 C（*2）の記号があるものは、当該学生の報告書のうち、記号部分を〔上〕に先に引用的に紹介したことをさす。

「はじめに」で強調したように、各学生の報告書の全体像は、読者において繋いでほしい。

資料 A （第1学年）（学生 A）

1 実習校の概要と特色 全校児童数306名 第1学年 学級児童数21名。実施授業14時間 国(2) 算(5) 図(2) 生(3) 体(1) 音(1)

昨年創立100周年を迎えた伝統ある学校。学校教育目標「自ら学ぶ子（よく考える子・思いやりのある子・たくましい子）」。児童同士の学びを大切にしていた。年に数回、校内授業研修会を行うなど、教員同士が同僚性をもって働ける環境が整っていた。

2 実習で学んだこと (1) 児童理解 それぞれ違う環境で育ったもの同士が、集まって学ぶ学校。そこでの学びが社会人になった時の大切な資質となる。小学1年生は、みんなで一緒に生活するために規則・ルールがあること、集団で学習することが、まだわかっていない様子だった。1年生は、その基盤となる1番大切な1年である。

特別な支援が必要な児童との出会いは私にとって大きなものとなった。

大学の授業で特別支援について学んだものの、特別な支援が必要な児童は特別支援学級にいるものという固定概念が拭えなかったため、通常学級にいることに、驚きを隠せなかった。大学で学んだことが自分の中に吸収されていなかった。現場を目の当たりにする機会がなかったからか。

担任は「児童は、一緒に過ごすことで、お互いの個性がわかってきて、どのように接したらいいか肌で感じられるようになる」と言われた。彼に対し、事前にノートに薄く板書を書いておく、集団行動が難しいのでできることを用意するなど、できる範囲でベストが尽くせるように支援されていた。担任はベストな支援をされていたものの、他人に甘えてしない時、誰かを傷つけるような行動をした時は、他の児童同様に厳しく対応されていた。将来どんな環境でも生きていけるように考えておられた。

何でも吸収し周りの環境から影響を受けやすいのが、この時期の児童である。いろいろなことを抱え、学校に通っている。心の拠り所となるような学級、学校の基盤が児童理解だ。漠然と見ているだけでは、児童の心は見えてこない。常に意識してサインに気づく目を持ちたい。児童は周りの大人を見て育つことを忘れてはならない。

(2) 教師 教員の仕事は、授業や学級経営以外にも多々あることを再認識した。指導教員は「1年目は初任者研修があるので、自然と教材研究をする。2年目から4年目までどのように過ごすかで、その後の教師生活が決まる」と強調された。余裕をもって取り組むことで、精神的にも肉体的にも効率が上がることを実習中に身をもって感じた。

教師1人で育てるのではない。教師みんなで育てることが児童を守ることにつながる。そのためにも教員間で情報を共有することが大切だ。実習校では、熟年の教師が指導法や学級経営など若手教師に伝授し、教師同士が丸となり学び合う取り組みが行われていた。教師は教材研究を通して、同僚のアドバイスを生かすことが必要である。自分の引き出しを増やすことにつながる。責任をもち児童を育てることが教師の使命である。児童を愛する気持ちが教師の職務の原動力となる。

3 実習授業・研究授業 (*1)

4 真似したい指導法とその理由 (*a)

5 今後の課題 (1) 個人の課題 実習中に見えた私の欠点は自分に妥協し、ベストを尽くせなかったことだ。実習授業後、もっとできたはずと後悔することが多かった。児童の本当の学びにつながったのだろうか。さまざまな場合を想定しておらず、児童に自分の理想像を押し付けていたのかもしれない。

ある教師の授業では、私の授業では見せない反応を児童はしていた。児童の目の輝きが違った。わくわく・ときどきする仕掛けがたくさんあった。

失敗の連続だった実習。とことん自分に甘かった。実習授業中に見た児童の退屈そうな顔が目に残っている。焦って取り組んで、良い物ができるはずがない。前もって取り組み、心に余裕をもつことで、児童の抱えていることに気づくことができる。分からない

ことがあったら謙虚に聞き、学んだことを自分のものにして、自分から行動していきたい。

今の私は、あまりにも知らないことが多すぎる。特別な支援がいる児童への対応をはじめ、多くの先生のさまざまな指導法がある。いろんな意味での教材研究。周りの人とかかわり、刺激し合い、困難にチャレンジし、経験を積むこと、自分自身を見つめ直し、成長することだと考える。

児童は教師の姿を見て育つ。そのことを自覚し、教師としての使命感を持って行動しなければならない。いろいろなことを経験し、学び続ける姿勢を児童に見せたい。私は児童から憧れられる教師になりたい。児童から好かれたいというわけではない。一生懸命児童と関わり、仕事をしている姿を見せ、自分自身の生き方を児童に見せたい。学び続ける姿勢を見せることで、憧れの対象となる。

最後に、将来を担っていく児童を愛することを忘れないことだ。愛情をもって、時には厳しく、時には優しく接していきたい。

(2) 学校・教育・地域・社会の課題 (*2)

資料 B (第1学年) (学生 B)

1 教育実習、実習校の概要 全校児童数292名。第1学年 学級児童数25名。実施授業9時間。国(2)算(3)図(1)体(1)音(1)道(1)

歴史ある町並みが残る地域。地域の建物の中で全児童の作品を展示し、「ふるさと」に対する児童の思いを伝える取り組みがあった。4年前から続く総合表現では、6年生が6年間で学んだ地域の歴史を表現する。祭りや学習発表会などに向け、児童は一体となって練習に取り組んでいた。指導は地域の方や先生方が行い、使われる曲は全て地域の方や教職員が作詞・作曲された。学校・教師・児童や地域の距離がとても近いと感じた。伝統が受け継がれながらも、児童・教師・保護者・地域の方の思いが取り入れられ、昔と変化して現れていることに、とても感動した。

学年を越えた関わりも行われていた。「6年生が引き締まると学校全体が引き締まる」と担当教員が話された。下級生は上級生を見て伸びていくことができる。

2 児童理解 (*a)

3 授業 (*1)

4 教師の仕事 どの先生方も教材研究をされていた。学年の枠を越えて相談し、出たアイデアの中から今の児童に合ったものを決めるなどして、連携を取っておられた。評価方法や基準も細かく話し合われていた。児童帰宅後は一日の出来事を楽しそうに話され、改善すべきところも話し合っておられた。授業は計画を持って臨み、振り返る積み重ねの繰り返しである。次へ繋がる反省を繰り返し、学び続けていきたい。

朝来たらすぐ宿題の丸付け、時間を見つけて授業

ノートのコメント。先延ばししない。有意義な時間を過ごす。優先順位をつけ、効率良くこなさなければならぬ。教師はどんなに忙しくても、一人一人違う全ての児童に目と心を向けることが大切である。自分に余裕がなくなると周りが見えない。

担当教師は、算数の授業の開始時に毎回のようには前までの復習問題を取り入れておられた。内容のレベルが毎回少しずつ違っていた。授業1時間だけで知識を付けたり、考えたりするのではない。1時間の中だけでは個人差が出てくる。復習が個人差を解消し、長いスパンを持って定着を図ることができる。「分からない。思い出せない。」と口に出して悩んでいる児童。それに気づき、教えている児童。解いていく道筋を思い出し、答えを導いた児童の表情は清々しい。その毎回の嬉しさの積み重ねが学ぶ楽しさに繋がってほしい。先生はどのぐらいできていたか把握しておられた。常に児童の理解度を把握しておくことが大切である。

プリントを終えた児童は、余白に問題を作り、解き始める。読書を始める児童もいた。1年生ですごいと思った。どのような働きかけで児童がそのようなことを身に付けたのか。児童がしていることにしか目がいかなかった私は、なぜ力を付けることができたか考えられなかった。無駄な時間をつくらぬよう教師が意識し、児童にも自覚させ、意図的に先生が指示されていた。授業時間の効率よい使い方を意識したい。

5 学校・教育・地域・社会の課題（*2）

6 自分を見つめる（*3）

資料 C（第2学年）（学生 C）

実習校の概要 全校児童数203名。第2学年 学級児童数20名。実施授業10時間 算(6) 国(1) 音(1) 体(1) 道(1)

1 実習の目標（*a）

2 児童理解 配属学級は、元気いっぱい何でも意欲的であり、いつも一生懸命だった。だからこそ、許せないことがあるのだろう。比較的自分の感情のままの言動が多いため、注意や遊びからケンカに発展することが絶えなかった。ケンカをするとヒステリックになり、机を倒したり、物を人に投げたりする。すねて泣きじゃくる児童もいる。そして、思ったことを素直に口にする。実習初めは、そのような児童が少し怖いと思っていた。日が経つにつれ情が湧き、怖いという気持ちは消えていた。なぜ、児童が怖いと思ってしまったのだろうか。きっと、児童に好かれたいと思ってしまっていたのかもしれない。自分の弱点を見透かされ、非難されるのではないかと思ったからかもしれない。

実習を通して、児童が好きだけでは、児童の前に立つ資格などないことを実感した。何事にも一生懸命取り組んだ。実習中の私にはそれしか出来なかった。

実習中、児童のケンカにどこまで関わった方がいいのか悩んだ。私は、ケンカをした児童と、一対一で話をするということを繰り返した。一対一で向き合うと、より児童にあった対応が求められていると感じた。児童にごまかしは利かない。自分の中にある言葉の中から、その子にあった言葉を選び、伝える。だから、児童理解が求められ、自分の人間力が試されていると感じた。また、児童一人一人と向き合うことの大切さを学んだ。児童が自分の口から、理由や気持ちを言葉にして言えるように聞き出し、それに対して声かけをする。この子に合う言葉は何だろうと模索し悩んだ。すべての児童が上手く自分の言葉で話せないだろう。そのため児童の言葉は材料にすぎない。児童の言動全てから児童理解しなければならない。私にはとても難しいことだった。また、全ての児童が一度で何が悪かったのか理解できるわけではない。少しずつでも自分の気持ちの伝え方を学んでいって欲しい。児童の中には、なかなか響かない子もいる。あの子には、どうしたらわかってもらえるだろうか。児童一人一人と向き合うことの難しさも感じた。善悪の判断が出来ない児童もいれば、善悪の判断が出来きても、自分の感情を上手くコントロール出来ない児童もいる。一つ一つ丁寧に指導することが求められるし、児童が自分の感情を抑えられるようになるために、根気強い指導が求められていると感じた。

3 児童にとって学びある授業づくりのために

実習授業では、特に教材研究が出来ていないことが目立った。児童に対する発問や声かけは、児童の実態に応じて変えなければならないが、臨機応変に対応することが出来なかった。臨機応変な対応は、十分な教材研究がなければ出来ない。また、自分の中で児童にどんな力を付けさせたいのかが、明確に持っていなかった。何のためにするのか、一つ一つ理解出来ていなかった。そのため、授業を進めているうちに、めあてからずれてしまったことがあった。何を引き出すための発問なのか、何の力を付けるための授業なのか、しっかりと自分の中に、持っていなければならないと学んだ。授業をするには、授業内容の数倍もの事前学習、徹底した教材研究が必要となる。考える時間と精神的な余裕がある学生のうちに、しっかりと教材研究をしておきたい。

実習中の研究授業では、承認の声かけが無かったと先生方から指摘を受けた。私は自分のことで精一杯で、主である児童のことを考える余裕が無かった。承認することで、児童はもっと意欲的に授業に参加することができただろう。そして、私は児童と目線を合わせて授業することが出来ていなかったと指摘された。注目して聞ける学級にするためには、児童に向かって語ることが大切である。聞いていない児童も、先生と目が合えばハッとすることも出来る。常に見られていると

いう意識にさせないとだめなのだ。

(*)

私は自分自身の変化だけでなく、親子関係も変化した。昔は親が嫌いだった。傍から見れば、立派な親に見られていただろう。周りの大人には、親を大事にしろと言われた。そんなこと頭ではわかっていた。でも、出来なかった。なぜ出来なかったのだろうか。私は今まで、親が二人で話していると自分の悪口を言っている気がしていた。今でも気にするが、昔ほどではなくなった。ずっと親に嫌われていると思っていた。しかし少しずつ変わった。いつの間にか私のことを認めてくれるようになっていた。最近、親に「変わったね」と言ったら「私が変わったから」と言われた。自分が変われば周りも変わってくれる。私は身をもって体感することが出来た。

児童もそれを感じられるように支えていきたい。私は今でも頭ではわかっているのに気持ちがどうにもならない時がある。ヒステリックになったり、冷静さを失ったりする。そんな自分が教師になってはいけないと自己嫌悪に陥る。それが今の自分の大きな課題だ。きっと児童にも頭では理解していても気持ちがどうしようもないことがあるのではないだろうか。私なら、そのような児童の理解者になれる。自分の経験を生かして関わっていききたい。

4 自己理解 実習を振り返ってみると、毎日ケンカばかりする児童の対応と、質の高い授業をするために必死だったと思う。自分がこの学級に入って迷惑だったのではと考えてしまうこともあった。しかし実習の後日、担任の先生から“何事にも一生懸命に頑張る姿が児童の心を動かししました。「先生がいないとさみしいね。」と呟いています。”という言葉もらった。その時やっと、私の実習が自分のプラスになった気がした。実習中は、一生懸命やっていたが自信がなかった。そんな私の研究授業では、児童はとても真剣だった。私は、先生方がたくさん見に来られたからだと思っていた。しかし“児童が応援してくれていましたね。”と先生から言われたとき、全く考えてもいない言葉で驚いた。児童が私を応援してくれていたのだと知ってとても嬉しかった。教師になりたいと心から思った。そして、より一層努力しなければと思った。同時に、私は児童理解が出来ていなかった。本気で取り組む実習生の授業に対しては、児童は積極的に応援しようとしてくれるのだと感じた。しかし、教師になったら本気で取り組むだけでは応えてくれない。質の高い授業をしなければ、児童からの信頼は得られない。そのために、学生のうちに徹底した教材理解・自己理解と多くの経験をしていきたい。

実習で一番学んだことは、自分がいかに甘かったかということである。ただ児童と触れ合いたい、現場がどのようなところか学びたい。そのような安易な気持ち

で行った私は、実習初日で反省した。実習初日は3連休明けということもあり、落ち着きがなかった。先生方が注意しても聞く様子などない。先生で無理なら、会って間もない私が注意しても聞くはずがない。1日目にして、くじけそうだった。実際は、もっと悲惨な現場もあるのだろう。思い通りにいかない児童に、くじけることなく向き合っていかなければならない。今の私にできるだろうか。教師になって出来るか出来ないか考えることなど出来ない。現場はとても忙しく、立ち止まって考える時間などなかった。しかし、学生には考える時間と精神的な余裕がある。今のうちにしっかりと考えておかなければならない。実際の児童と触れ合えたことが、自分のやる気に繋がったと思う。今後も児童のかかえる問題やその原因について、もっと研究していきたいと思った。

5 教員の使命・仕事 私は実習を通して、教員という仕事のやりがいを感じた。今まで教員の多忙さをよく耳にしていたが、実際の現場は想像以上だった。しかし、児童の笑顔を見て救われたことが多かった。児童と関われる喜びがたくさんあったから、やりがいを感じられたと思う。きっと大変な仕事も児童のためだと思うと頑張れるだろう。仕事をいかに効率よくこなしていくかが求められている。

私は実習中余裕が持てていない時があった。そんな時でも、児童の前では笑顔でいなければいけないと思った。決して教員は、途中で逃げ出すことは出来ない。どんな時でも笑顔で学校生活を過ごせるようにしなければいけない。どんな時でも児童一人一人を把握して、児童の異変に気付かなければならない。教員は、視野の広さと心の余裕が必要だと感じた。教員に求められるのは高い専門性と豊かな人間性である。そして、常に成長し続けることである。

6 学校・家庭・地域・社会の課題 (*2)

資料 D (第3学年) (学生 D)

1 実習校の概要と学校の取り組み 全校児童数76名。第3学年 学級児童数11名。実施授業10時間 算(5) 国(3) 道(2)

学校教育目標「なかよく(徳)、かしこく(知)、げんきのよい(体)児童の育成」。めざす学校像は児童が笑顔で生活でき、教育環境が整った安心・安全で、地域に発信し、地域とともに歩み開かれた学校づくり。少人数でありながらお互いが適度な距離を保とうとしていた。そのことで関係性が希薄になり、どこか白々しい複雑化した人間関係があった。どこかぶつかることを避け、今の関係を崩したくない、仲が良くない学級メイトとはあまり話したくない、という雰囲気醸成し出されていることに驚いた。2人以上集まれば、自分と気が合う人、合わない人はいるだろう。しかし、6年間を共に過ごしていく学校生活で、自分と気の合

う友達とばかり一緒にいることはできない。自分と違う考えや意見がある、思い通りにいかない関係がある。それを知ることによって自分を知っていく。教室はそれぞれ個がぶつかりあい、それぞれの色が混ざり合いながら新しい色を作っていく場なのだ。

相互理解を深めるために、異年齢交流をあげる。「高学年は低学年のお手本になるように、低学年は高学年のいいところを真似するように」という方針のもとに、掃除時間は縦割班で行っていた。学年の違う人と一緒に掃除を行う中で、目の前にいる相手を知りたい、知ってほしいという心の距離が縮まりやすい環境づくりをしていると思った。

また、全校と幼稚園で俳句の取り組みを行っていた。季節の変わり目に校長が各学級に出向き俳句の授業を行う。全校集会で発表の際には、なぜその作品が選ばれたのか、よくない作品も取り上げて、皆でどこを変えたらいいのかを意見発表していた。普段の授業と違い、同じ学級の友達だけでなく年齢・学年を超えて学び合うことができる利点がある。発達段階に即した学習過程を超えて、児童の感性でいい作品は選ばれるので、幼稚園児や低学年の作品が高学年の作品よりも素晴らしいこともある。年齢の壁を越えて学び合い、高め合える学校集団作りがされていた。

こうした取り組みは、素敵だと思った。しかし、取り組みはすばらしいものの、異年齢ゆえの問題が生じている実態も見受けられた。低学年の児童がまじめに掃除をせず、高学年の児童が1人で掃除をしていたり、高学年の児童が低学年の児童にちょっかいを出して困らせたりという光景を見かけた。いい取り組みを中身でだめにしないように、改善策を考える必要があり、PDCAが大事である。

自分が1人の大切な存在であると気付かせると同時に、隣にいる友達もかけがえのないたった1人なのだという。1人1人が違うからこそ、得意なこと・苦手なことがあるからこそ私たちは輝ける。しかし、私たちは、自分と似ている人を見つけては安堵し、みんなと違う人を排除したがる。おかしいことに、誰か1人を排除することで、残りの人は結束を強めるのだ。違いを認め合えることは素晴らしいことのはずなのに、なぜこんなことが起こってしまうのか。

2 人と人の関係性 障害者支援施設の介護等体験では、それぞれ自分の障害と向き合い、自分にできることをしていた。今まで私は健常者がたくさんいるところで過ごしてきたため、驚くことがたくさんあり、不安があった。しかし、だんだんと見えてきたことがある。この関係性こそが本来あるべき姿ではないのかと思った。自分自身をしっかりと持ち、自分と他者を結び付け、お互いの難しい所、できないところを補おうとする。なぜこのような関係作りができるのか。すべての人がそうした気持ちを持っていたわけではない。

できる人とできない人の違いは何か。それは、生育歴に関係がある。その人が今までどんな関係を築いてきたのか。ある関係性の中で質ある関係を築いてきたことがその人の人格に大きく影響を及ぼす。違いを受け入れることができるからこそ、違いを尊重しあえる。私たちは、違いをなくそうとそればかりに目がいつているのではない。平均であることを求めている社会に無意識に染まっている。理想とする人間社会は何か。目指す人間像は何か。どんな大人になってほしいのか。児童達と共に成長しあいたい。言葉にするのは簡単だが、どう成長するのか。何に向かっていくのか。人格の完成とはなんなのか。現在、まだその答えはわからない。今生きているこの社会に絶望したことや嘆いたことはそれほどない。この社会の何がいけないのか、大方のことに満足し、悲しい出来事から目を背けていた自分の目線からは見えてこない部分の方が大きい。しかし、社会的弱者の立場では、息苦しい世界であることは間違いない。学校に行かなければ死なずにすんだ児童が何人もいる。それ以上に生き地獄の中戦っている児童が何人もいる。戦争・紛争、貧困、難民、飢餓、虐待、世界に目を向ければもっと多くの問題が山積している。どこから手をつけどうした解決方法をとっていけばいいのだろうか。

大きすぎる課題が見つかり、教師という仕事の本当の大変さは、こんなものではないことを知った。

3 実習授業を通して (*1)

4 児童と自分 (*2)

5 学校・家庭・地域の連携 (*2)

6 個人の課題 実習を通して、学ぶことができたたくさんのことに感謝している。それ以上に、大学で振り返りを行うことで実習中では気付かなかったことに気付き、さらに自分と絡めて深く考えることができた。自分に足りないことや社会の問題にも改めて気付いた。いかに、自分がよければという考え方で生きてきたのかを痛感した。自分の視野だけで生きていては児童全員を理解することは不可能だ。さらに、これから出会う人々との関係を築いていく多くの人は、2つとないたった1つの個である。その1つ1つの個と正面で関係を築くためにも、私の個を大事にそして成長させていきたい。

資料 E (第5学年) (学生 E)

1 実習校の概要と実習概要 全校児童数80名。第5学年 学級児童数6名。実施授業10時間 国(1) 社(1) 算(6) 体(1) 道(1)

2 実習目標とその振り返り (1) 児童理解 様々な時間を共にすることで、いろいろな面が見えてきた。抱える心の闇(家庭、人間関係等)とは対照的に明るく振舞う姿、いつもは大人しいが対戦となると熱くなる姿、辛辣な言葉を発することが多いが友達にできな

いことがあると真っ先に助ける姿などである。

担任は、色々な経験や学びを同じ空間ですることで、児童一人一人と接し、児童理解を深めることができる。児童の学びがより深く身に付くものにする為の児童理解だ。児童理解が授業に繋がらなくては意味がない。しかし私は、自分のことに精一杯で、児童の将来を見据えた上で、今必要なことは何か、その児童の為の大切な「今」を過ごすことができなかった。児童にとって、力をつける時間が減ってしまった。その場その場が戦いということを重く心に受け止めなければならない。

地域の協力の下、総合の時間に赤米の刈り取りや全校で舞蹈を教えてもらう機会があり、頼もしい姿、楽しそうに踊る姿が見受けられた。これらの体験と一緒にし、新しいことが目の前にある時、児童は目を輝かせていた。本物に出会う授業が導くことを目にした。

(2) 自己肯定感に繋がる支援 配属学級は、個性の色に溢れた学級だ。普段の生活では個人の意見を出しているが、授業内で発表する児童は偏る。特に算数の授業では、苦手意識を持っている児童の発言が極端に減っていた。苦手意識のある児童を見ると、取り掛かりもしない姿があった。その為、担任が意図的に児童をあて、理解を図っていた。

学級の中には、後向きな発言をする児童がいた。担任は、一人一人の背景を理解しながら、決して怒るのではなく、児童が自ら気づいていけるように注意を払う姿が見受けられた。20日間の中で担任が怒った姿を見たことがなかった。自分がどんなことを言われても、怒るのではなく、笑っていた。そんな中、体育の授業で揉め事が起きた。次の授業を1時間使って話し合いをした。ずっと冷静に聞いていた担任が、声を裏返しながら「そこは笑うとこじゃない。おかしいと思う。それでいいんか。」と投げかけていた。話し合いの場では、中立な立場でなくてはならない。しかし、いけないことやおかしいと思うことは、一人の人間としてまっすぐに児童にぶつけていた。

6年生17名は、意見発表の場では、積極的に手を挙げ、発言していた。朝礼でも6年生が感想を発表すると、低学年の児童も手を挙げ、発表していた。なぜ、こんなにも積極的に発言ができるのか。6年生の算数の授業を見た。目的意識が持てる導入、既習事項と結び付けての学びが展開された。担任が一人一人を見ており、発表の場では「Aさんに発表してもらいますが、BくんとCさんも同じ考え方をしていましたね。説明し辛いところは(説明を)助けてください。」と声をかけていた。全員参加、個人を大切に授業が展開されていた。普段はなかなか意見を出さない児童が、違う視点からの答えを発表した際、全体で共有し、理解を図っていた。発表した児童の顔は照れくさいような、喜びの表情をしていた。授業を受ける児童の顔は、

いきいきとした表情をしていた。みんなで授業を作るという雰囲気だった。児童同士、教師-児童間でしっかりと関係の持てる関わりの為に、学級経営、児童との関係、児童同士の関係が大切である。

(3) 研究心を向上させること 児童にとってよりよい学びに繋げるには、児童理解は必要不可欠である。教師自身も学び続けなければならない。2度の研究授業の研究協議会に参加できた。本物の児童を相手にする、生の意見が飛び交った。年齢も経歴も関係なく意見を出し合い、どんなことでも真剣に協議されていた。“教師は研究し続けることによって子どもに近づける”(大村はま)が実践されている場所だ。

しかし、2度の研究協議会に参加できたにも関わらず、実習授業は研究不足であった。1つの視点にとらわれてしまったこと、十分な時間を取って熟考できていなかったことが原因である。時間の使い方と、他案がないか熟考することが今後の課題である。

3 大学の学びと実習での学び

(1) 実習での実施授業 (*a)

(2) 模擬授業の振り返り (*a)

(3) オープンキャンパスと仲間 (*1)

4 2年次春季課題 『新編 教えるということ』(大村はま著・ちくま学芸文庫)は、1日目でもプロ意識を持ち、教壇に立つことを強調している。教職は、人を育てる仕事だ。“若いから失敗しても良いということは絶対ないのだ”“子どもは再びその日を迎えないし、その時間も迎えない”。これらの言葉は今、深く胸に突き刺さる。児童一人一人に、いきいきとした時間、成長できたと思える時間を作れたか。

研究することは、前進したい、力をつけたいという気持ちである。子どもという存在もまた貪欲にそういった力をつけたいと求め、勉強するその苦しみと喜びの中に生きている。教師は、研究し続けることで子どもという存在に近づける。研究を通し、指導者としての子どもたち一人一人にとって、学校を本当の学びのできる、魅力的なところにしていかなければならない。個人差を理由にひいきするのではなく、どの子にも成長しているという実感を持たせることが教師としてやるべきことである。魅力がない教室にならない為にも、発する言葉に注意を払い、義務的な授業ではなく、一人一人にとって意味のある時間を過ごせる授業にしていかなければならない。教材の多様な利用の仕方などを考えることで、一人一人に応じた支援ができる。

5 今後の課題 (1) 個人の課題 教える側の自覚を持ち、児童にとってより深い学びになる為に準備をしなくてはならない。児童の輝きを大切にしていける為に私にできることは、様々な材料を集めることだ。魅力のある授業、学級作りにも繋げるために、自分の中身を大きく成長させたい。児童にとって何の為の学び

かを考え、同じ世界で学んでいきたい。この実習で得たことを大切に、反省点と改善点をしっかり受け止め、今後へと繋げていきたい。

十分に記録と反省をとることを大切にしたい。大村は、しばしば他者に批評してもらっている。偏った見方にならなくてとてもいい。日々の中でも実践することはできる。自分の考えをしっかりと持ちつつ、他者の意見に耳を傾け、よりよいものにする為に努力したい。

(^{*2})

(2) 学校・教育・地域・社会の課題 (^{*3})

6 教師になるということ 未来のことを考えながら目の前のことに全力を注ぐというのは、途方もないことのように思う。結果が目に見えない上に、その時にならないと、良いことも分からない。それでも、自分がいないかもしれない未来のことを思って、力を注ぐのはなぜか。その答えの先に何かがあるのか。結果を追い求めず、少しでも未来がよくなることを信じて、未来の為に、未来を生きる人や子どもたちの為に尽力することが教師の仕事だ。“自分で自分の仕事を愛するというのが、結局良い仕事のもとになる”と大村は言う。この仕事を愛することが、子どもの為、自分の為、そして、未来にも繋がる。

大村は“子どもが可愛いのであれば、子どもをとにかく少しでも良くしていける、教師という職業人としての技術、専門職としての実力を持つこと”という。何でもしてあげるのではなく、その子の将来を考えて本当に磨き上げなければならない。その為に、自分を磨き続ける。それが研究や、誰かとの対話かもしれない。それらを通し、児童が力をつける為の手伝いをする。常にアンテナをはって日々を過ごしたい。教師になった時、そして今も、やらなければならないことを考え、自分を見失わずに時間を大切に過ごしたい。

まずは、出会った目の前の児童の未来のことだ。実生活に繋がる学びこそ質の高い学びだ。児童の実態を踏まえ、児童の生活に基づいた実体験の機会を増やし、生活に根付いた学びを大切にしていける。教師もまた然りである。自分のことができなければ他者のことも十分にできない。自分の生活を見直し、学び、それを次に繋げていく。教師も学ぶ立場なのだ。

資料 F（第6学年）（学生 F）

1 実習校の概要と実習内容 全校児童数550名。第6学年 学級児童数31名。実施授業10時間 道(3)算(2)理(2)英(2)体(1)

(1) 児童・教師・学校 「遊びたい、一緒に話したい。」なかなか気持ちを表に出さない高学年。観察実習での高学年の様子を踏まえ、自分から関わりを持っていくことができた。小学校教育の集大成でもある6学年。学校行事でも学校の代表として、係りの仕事や委員会に取り組んでいた。異学年交流が盛んに行

われ、休憩時間も様々な学年が混ざり合って遊ぶ姿を見ることができた。

1学級が約30名の学校。児童一人一人の実態を把握していくことは大変なことと思えた。6年生31人が集まると様々な生育歴や個性、特徴、配慮する点などがあつた。授業においても進度の違いがはっきり見えた。受験を控えた児童もいる、勉強が苦手な児童もいる。その上で一人一人の実態がある。真の実態に合わせた授業を行うことが困難だと思った。発表方法や考える時間を工夫する。しかしどこかに合わせて進まなければならない。大規模ゆえに抱える問題がある。

教員の授業以外の様々な職務についても触れた。運動会や研究大会へ向けての準備が行われている時期で、より多忙さを感じた。その中で日常の授業、児童の対応なども行っていた。休憩時間には、児童と共に校庭を走り回ったり、縄跳びをしたりする姿も見えた。授業だけの関係ではない、休憩時間の遊びを通して関わることが何より大切。学級では見えない児童の姿が見えてくる。そんな関わりからつかむ児童の実態も多くあると感じた。常に教師はアンテナを張っている。給食を食べている時も、教室を移動する時にも、不自然なこと、何か気になることがあつたらすぐに対応をしていた。自分のことで精一杯だとなかなか見えてこない。多忙な中で教師という仕事をやりこなしていくことはとても大変なことと思えた。始業時間から終業時間だけではやりこせない、そんな実態があつた。

学校全体での協力体制を間近で感じた。学年での共有、管理職との共有が常に行われていた。学年ごとに起こっている問題の相談・共有、授業の相談、進捗状況の確認などが日々飛び交っていた。必要に応じて管理職の先生方への報告・相談も行われていた。運動会シーズンということもあり、学年・学校全体を通して先生方の総力を合わせた様子が多く見えた。

学校では児童の自尊感情を育むことを目的にし、様々な取り組みが行われていた。その中の一つ“グリーンカード”。日本サッカー協会が考案したカードで、フェアプレーをした選手に対して出すカードだ。「してはいけないこと」のレッドカードばかりを示すのではなく、「良いこと」に対して賞賛を与えるカード。日々の学校生活の中で、①ルール・約束・きまりを守る人②最後まで頑張りぬく人③失敗や間違いを素直に認める人④誰にでも、温かく、思いやりの気持ちで接することができる人、など素晴らしい行動をしている人に対して出されていた。児童も、そんな行動を心がけようと思える上に、教師自身も、そんな側面から児童を見るという意識が持てると思った。

(2) 児童の自尊感情を高めるために (^{*4})

(3) 実習授業 授業終了のチャイムに合わせて終了することができた。しかし、そのために大きく指導案からの変更を余儀なくされた部分がある。十分に考え

させたい、行わせたい活動が短縮されてしまった。問題は授業の手順にあった。31人という大人数の学級。一度活動に入ると、その後での指示はなかなか通らないという現実が見えた。活動前に教師自身が伝えるべきことを把握しているかが大切。そして、すべての児童にわかりやすいように伝える必要があると分かった。理科では活動の内容を、まず、次に…と順を追って説明し、活動に移った。算数ではおよその面積を求める活動を行った際、配布したワークシートに①どんな形に見えるか考える。②図の中で必要な長さをはかる。③縮尺（しゅくしゃく）（★）を見て実際の長さを求める。④実際の長さを使っておよその面積を求める。という手順をあらかじめ示しておいた。何をどのように進めていくのか把握しきれない児童もいる。算数では学力の差が大きく表れていた。小さな工夫が必要だ。(4) 研究授業（道徳 主題名：『自分の番』）(*1)

(5) 生活とつながる授業 (*2)

2 オープンキャンパスでの模擬授業 (*3)

3 社会の課題 (*4)

4 教育の課題 今の教育に求められるものは何か。人間の持つ力を活かし暮らし、生きる力を育むことができるのだろうか。児童の教育の目的とは何か。良い大学、企業に入ることが目的なのか。偏差値や点数など数字で評価する学力が注目される。そのために夜遅くまで進学塾へ通い、学校以上の勉強をする。そこで学ぶものは何か。人より高く人より優位に立つための勉強を一生懸命行っていると感じる。家族で食事を取らない個食（孤食）も増えているのもこれが一つの要因。非行へと走る児童も増えている。大人の常識で児童を生活させすぎだと私は思う。“生きる力”お金があっても生き残れない、その現実を児童は知っているのだろうか。本当に生きていくためには何があるのか、どんな力をつけていかなければならないのか。意識を新たにしなければ、日本の力はどんどん衰退し、格差はより大きくなるだろう。知識に偏らず、考えること、自己選択できる力を身につけていくことが生きていく上で最も重要になってくる。

「私の見えているようで見えていない、見ていなかった世界でした。」介護等体験を終えての私の率直な気持ちであった。見た目では見えない心の障害を持

つ方たちと関わる、知的特別支援学校で生徒と関わる。今までの私の経験ではほとんどしてこなかった。そう考えると私がそれまでしてきた経験や生活は、社会の一部でしかなかった。私自身そのような人々と関わる機会がなかった。もっといろいろな人がいるのに、見えていなかった。職業についても何があるのか知らなかった。表に見えない仕事もたくさんあるのだと大人になり、初めて気付かされている。児童のころに世界をもっと大きく、現実になんげ近づければ、真の実態に合わせた教育へは結びつかないと感じる。

5 教育実習を終えて 自己を見つめ直すことが大きな課題。自己理解なしには今後の進路は切り開けないと実感した。大人の姿を見て児童は育つ。児童の先を行く存在として何を知り、何を考え、そして何を伝えていくべきかを考え生活をする。自分の与えられた命を精一杯生きること。児童に伝えたことで私自身も再認識させられた。

おわりに

以上、いささか変則的な編集となった。10年以上前、小文のように実習体験の対象化作業を始めた時点では各項目別に実習体験を抜粋に考察を加えていた。その後、学生個々の報告書を一括して紹介してきた。学生指導の一環として個々の学生の実態に即した指導の必要性からである。今回の編集方針では、現状と課題とを明らかにした。学生指導に生かしたい。

実習体験学生全体に対する教育実習指導の現状と課題については、別途、報告した¹⁾。

註

- 1) 佐伯育郎・徳本達夫「教育実習指導の現状と課題」(『広島文教女子大学教職センター年報』創刊号、2013年所収)